

想像される東京の将来の姿（素案）

【人口構造】

- 全国の人口は今後とも減少していく中で、東京の人口も2020年をピークに減少を始める。ただし、減少ペースは全国のそれよりも緩やかで、全国比では東京の比率はむしろ高まる。大都市東京は、相対的に人口の集中が続くものと見込まれる。
- 一方で、都内の高齢者人口比率は今後25年で1割以上増え、2035年には約3人に1人が65歳以上という時代を迎える。特に、75歳以上の後期高齢者数の伸びは顕著で、65歳以上の高齢者数全体を上回る伸び率で増加する。地域別では、郡部と島部とでは、全国を上回るペースで高齢化が進展する。区部においても、高齢者人口比率が4割を超える自治体も現れるなど、都内においても、地域間で高齢化の進行に差が生じる。
- 高齢者の中でも、とりわけ単身世帯の増加が今後より一層深刻になっていく。2005年から2025年までの20年間で、約1.6倍に増える見込みであり、今後「ひとり暮らしの高齢者」が都内各地で多くいる状態になる。「ひとり暮らしの高齢者」の世帯数の増加率も、各区市町村で差が出る。
- 他方、子どもの減少は止まらない。現在、都内では区部を中心に合計特殊出生率が1を割り込む自治体が10以上あるが、今後2010年から2035年にかけて、都内の年少人口は3割も減少する見込み。

- 高齢化が進行し、特に「ひとり暮らしの高齢者」が増える一方、子どもの数はますます減少していく東京。こうした社会においては、見守り等の新たな行政需要が拡大していくことが見込まれるほか、少子化対策の必要性が強まることに応じた更なる行政需要も増えていくことが見込まれる。一方、生産年齢人口の減少に伴う税収への影響も懸念される。

【福祉・医療】

- 要介護認定者は2002年から6年間で約1.3倍増と、既に増加傾向が顕著になりつつある。今後、老年人口の増加に比例して要介護認定者数を推計すると、2035年には60万人以上に達すると見込まれる。前述したように、特に後期高齢者の増加が今後顕著になっていくことを考えれば、要介護認定者はさらに増加するおそれもある。
- 被生活保護人員数も増加傾向は既に顕著。2005年までの過去15年の間に、被保護人員数は約2倍に増加。このうち、特に、65歳以上の高齢者の比率の増加が顕著。

要因別では、平成20年度では医療扶助、生活扶助、住宅扶助の3つがほぼ全体の3割ずつを占め、保護費の内訳では、医療扶助が全体の約半分を占める。

- 医療の関係では、年齢階級別受療率は年齢とともに高まる傾向にある。今後、高齢化の進展に伴い医療機関の利用者数が増加し、医療費の増大に伴う財政負担が大きくなるおそれがある。
- 待機児童の問題も深刻化しつつある。都内の待機児童数は最近10年間で約1.6倍の約7900人に増加した。これは、全国の待機児童数の約3分の1を占めるものであり、人口比で見ても東京の待機児童数の問題は特に深刻である。

- 介護・医療・生活保護の社会保障関係の分野では、今後被保障者が増大することが予想される。生活保護など、一部景気の影響に左右される要素もあるが、今後、高齢化の進展に伴い、介護・医療を含め全体の社会保障関係の対象者は自動的に増加することは明白である。従って、これら社会保障の負担は、一層深刻になることが見込まれる。特に、高齢者の数が突出する東京においては、その影響は全国に比べて相当大きいものと予想される。一方で、全国で突出している待機児童への対策は、次代を担う世代を育成する観点から急務の課題であり、さらなる財政出動が要求される状況が続くと見込まれる。

【まちづくり・交通・インフラの老朽化状況】

- 都内においては、震災時に火災や建物倒壊などの危険性が高い木造住宅密集地域が、山手線外側や中央線沿線を中心に相変わらず多い状況にある。
- また、都内における築40年以上の分譲マンション戸数が、2008年の5万4千戸に対し、10年後の2018年には約4.5倍の24万5千戸に膨れ上がる見通しであり、マンションの老朽化が加速的に進んでいる状況にある。
- さらに、都市計画道路の整備状況は、都全体で約57%、首都圏環状道路整備率は約47%となっており、海外都市と比較しても非常に低い状況にある。これら道路整備の遅れにより、首都圏全体で慢性的な交通渋滞が発生しており、渋滞による経済的損失は東京都では年間1.2兆円、首都圏全体では年間2.8兆円に及び、東京全体の活力を低下させている。
- 首都圏の鉄道網については、概ね整備されているものの、依然として激しい通勤混雑が発生しており、ビジネス拠点としての東京のイメージを損ねている。

- これら都市基盤整備の遅れが、大規模震災時の大きなネックとなることはもちろん、大都市東京のプレゼンスをも低下させる要因となりかねない。東京が今後とも発展していくためには、引き続き、一定規模の都市インフラ整備が必要となると予想されるが、その分、行政需要として反映してくることが予想される。
- さらに、上下水道施設、公営住宅、橋梁、学校改築など、膨大な公的都市インフラの更新需要が発生することは明らかである。増え続ける民間老朽マンションの建替え等に関しても、行政による支援の要請が高まってくるとすれば、さらに行政需要が増大する。今後、都市インフラの整備や老朽化への対応は、ますます財政を圧迫することが見込まれる。

【国際】

- 東京の都市間比較ランキングでは、「研究者」「アーティスト」「生活者」の観点から見た評価はある程度高いが、「経営者」「観光客」から見た評価は高くない。
- また、東京への外国人旅行者数は世界の主要都市と比べて低水準であり、ロンドンの約3割、香港の約4割程度にとどまっている。国際コンベンション開催件数も、シンガポールの約1/4と東京の国際的魅力が必ずしも高くはないことがうかがえる。
- さらに、海外主要都市と比較すると、東京の空港機能は弱く、東京港についても、アジア諸港の台頭により、世界港湾別コンテナ取扱量順位が、1991年の12位から、2006年には23位へと大きく低下している。

- このままでは、東京の国際競争力や、国際社会における地位が低下し、世界から取り残されるおそれがある。今後、目指すべき東京の方向性によっては、対策を講じるうえで、一定規模の行政需要が見込まれる。

【地域】

- 地域における近隣・地縁関係の希薄化が指摘されている。地域活動への参加者が漸減基調である一方で、住民と地域との関わりの希薄化が治安の悪化に影響していると不安を感じる人が多い。また、高齢者のひとり暮らしが増えていることもあってか、ひとりで亡くなっているところを発見される人の数は増えている。
- 地域活動の主体である町会・自治会では、役員の引き受け手がいない、いても高齢化・固定化しているなどといった課題も指摘され、活動の活性化に大きな影響を与えていることが伺える。

- 高齢化のさらなる進行に伴い、各地の地域コミュニティそのものが崩壊しかねず、防犯や見守りなどをはじめ、かつて地域自らで果たしていた機能が行政需要として大きく増大するおそれがある。

【教育】

- 児童虐待が社会問題化しており、都児童相談所の虐待に関する相談件数は、平成15年度の2,206件から、平成20年度にはおよそ1.5倍の3,229件と、大幅に増加している。
- 学校に目を向けると、教員から見た変化では、「授業中に立ち歩いたり教室外に出たりする児童・生徒」が増加し、「やる気や自信を持っている児童・生徒」は減少したと認識。また、「児童・生徒間の学力格差」は拡大したと認識する比率が増加。学校にクレームを言う保護者や自分の子どものことしか考えない保護者が増加する一方で、学校に協力的な保護者は減ったと認識している。
- 他方、都内の全中学生のうち私立に通っている生徒は4人に1人、同様に高校生では2人に1人と、全国で比べると、私立中学・高校の在籍割合が非常に高いうえ、遠距離通学の生徒が増えている。

- 学校、家庭、地域の連携による教育力の向上が求められているが、個性がより尊重される時代にあり、また地域コミュニティの課題も大きい中で、かつてほど連携は容易ではない。次代を担う人材をしっかりと育成するために、将来の社会の方向性を見据えて、あるべき教育の姿を模索した息の長い取組と、必要な政策出動を講じていく必要がある。

【産業】

- 東京は、区部に産業が高度に集積しているが、多摩地域では自治体により差はあるものの製造品出荷額等で高い実績を誇るなど、東京の産業は全体として高いポテンシャルを保有している。
- 特に、先端産業である情報通信業の都内企業数は、全国の約5割と高い割合を占めている。
- 一方で、東京は全国と比べ新設・廃業事業所割合がともに高く、都心5区を中心に、事業所の入れ替わりが激しい状況にある。

- 都内企業倒産件数は、2005年に2,376件、2008年はおよそ1.3倍の3,115件と大きく増加しており、都内全域で企業の倒産が依然として高水準にある。
- さらに、都内全体で製造業の事業所数・従業者数が大きく減少しているほか、商店街も減少しており、空き店舗がある商店街も依然として6割超と、商店街の衰退が深刻である。
- 都内の就職率に目を向けると、2006年で24.7%、2009年には18.6%と、都内全体で雇用状況が急速に悪化している。

○ 製造業を中心に産業の空洞化、商店街を基軸とした「まち」のにぎわいの低下、雇用状況の更なる悪化を食い止めることは容易ではない。一方で、医療・介護分野などでは、高齢化の進展に伴い、今後大きな需要が見込まれ、雇用を生み出すことが期待される。また、高度に人的・物的資源が集積している東京の特性を活かした、ハイテク分野など高付加価値型産業の充実強化も大きな活路となり得るなど、東京全体としてのポテンシャルは決して低くない。右肩上がりの成長が期待できない中で、全ての産業を育成していくのは難しい時代に入ってきており、ダイナミックな産業構造の転換も含め、今後の東京の競争力を維持し、雇用にもつなげていくための新たな展開を模索する時期にきている。